

## 有島生馬書簡ひとつ——武郎宛『御柱』観劇礼状——

町田 榮

有島生馬は画家・小説家、また能書家として知られる。長兄に武郎、四弟に里見淳（母方の山内家を継いで本名、山内英夫）をもつ、本名壬生馬（明二五・一一・二六～昭四九・九・一五 1882—1974）である。

日本近代文学館の所蔵資料公開の事業に、全七冊『文学者の手紙』（博文館刊）の計画が進行している。明十五年春から順次に発行の予定という。うち、第二巻『文学者の手紙白樺の人々』を紅野敏郎氏、山田俊治氏とともに担当した。白樺派諸作家の書簡を翻刻し、注をつけ、解説を書く作業である。この歳末に出版社と会って、最終うち合せ、出来た分の原稿渡しというところに漕ぎ着けた。

分担した仕事のひとつに生馬書簡がある。生前の生馬自身が館に寄贈した、若き日（明三八・五～四三・二）の滞欧通信、ペン書きの絵はがきが少し翻刻されている。すなわち、昭和五十八年三月十五日、五月十五日、七月五日付『日本近代文学館』報（72～74号）に三分載、十六本の「所蔵資料紹介」である。他にも館は、ヨーロッパ遊学中に合流した武郎との連名はがきや、以降、晩年にいたる折りくゝの便りを所持している。諸家の寄贈による。いま、館所蔵の生馬書簡を発掘して、まとめて公にしてみたい。

翻読にあたって、本学教授の福田立明氏、ドレイク氏、ホイットロック氏、唐沢徹氏、笹本孝氏、山崎博子氏に、退職された柴田光彦氏にもさまざまにご教示にあずかった。篤く御礼を申し上げます。

付言すれば、白樺同人作品集『白樺の園』（大八・三・一五刊 春陽堂）に有島生馬「十二年前の手紙」が採録されている。初出は大正三年八月三日付『読売新聞』四・五面月曜付録「消夏号」の五面の方に「八年前の手紙」と題して発表。「一九〇六年の夏」に志賀直哉に宛てた私信という。但し、館所蔵の文献ではない。

ここに、大正十年「十月二十六日」付の封書、毛筆の武郎宛書簡がある。あて先は「東京市麹町区下六ノ十」。発信は「鎌倉極楽寺」、署名は「壬生馬」とする。

東京市麹町区下六番町十番地は、武郎の私邸だ。敷地一一九〇坪内に和洋室、画室を含めて二十五室の建坪二〇〇坪、大庭園をそなえた豪邸という。建築、造園趣味の父武が経営して来た。没後（大五・一二・四）に相続する。隣接して生馬邸もあった。現住所「鎌倉極楽寺」は保養先である。もと新渡戸稲造の別荘であった。肺炎を病んで、前年初夏に鎌倉笹目谷に転地し、さらにこの五月ごろに極楽寺の海岸に移り住んだ。「壬生馬」は、すでに稀少となった署名である。大正二年より生馬を通称に用い始めた。武郎に対する親愛感を示しているよう。本文は次のように言い出す。

まだ芝居の御礼を申し上げませんでしたあの脚本は（以下略）

日付のうえで、武郎の『御柱（二幕劇）』（大一〇・一〇『白樺』第十二号十月号）の、誌上発表と同時の新富座上場（一〇・五・二九）と知れる。終演日は、十月二十三日付『都新聞』五面の広告欄に「当興行は廿九日千秋楽」とある。書簡中に「吉エ門」もある。戯曲を読み、観劇もしてその感想を述べる。冒頭部、礼状の遅れを気にかけているらしい。が、全文どこにも直接的な謝辞はない。一体、いく日遅れたというのか。療養の身が、小康をえて発信したのではあろう。この礼状、実は招待観劇にあずかった返礼ではなかった。

当年十月の演劇界は活況を呈している。各紙の広告欄には帝国劇場、歌舞伎座、明治座、本郷座、辰巳劇場、市村座、常盤座、中央劇場など一斉開場である。なかでも、『有島武郎氏作  
里見弴氏監督御柱』がひとり話題、注目を集めたようだ。主な配役は龍川平四郎Ⅱ中村吉右衛門、お初Ⅱ中村時蔵、嘉助Ⅱ中村鶴蔵、仙太郎Ⅱ中村又五郎、久和蔵Ⅱ中村吉之丞など。上演期内の新聞に、翌月の雑誌に紹介、劇評は多い。かねて高い前評判で迎えられてもいる。九月二十日付『都新聞』五面「十月の各座」、翌二十一日付『東京日日新聞』七面「十月の劇界」

に、『読売新聞』七面「よみうり抄」欄には、

▲有島武郎氏 が吉右衛門の為に書下ろした戯曲「御柱」一幕は雑誌「白樺」の十月号で発表される由

(大10・9・23付)

▲中村吉右衛門氏 本日出発信州諏訪に赴くが右は「御柱」主人公の故里を訪ぬる見学の旅行だと云ふ

(大10・9・24付)

武郎自身も十月二日付同紙七面日曜付録に「私の新作一幕劇『御柱』上演に就て」を寄稿している。

観劇して、「帰りましたらやはり少し疲れました芝居に少し長居し過ぎた様です」という。演目は『勝鬨<sup>めげえ</sup>源氏』一幕、『伊賀越道中双六』三幕、『松平長七郎』一幕、『御柱』一幕、『御存知梅の由兵衛』二幕の順である。開演から終幕まで観ていたはずはない。生馬の病中、なぜかおして上京、観劇した日はいつか。

館は大正十年十月十八日消印、三宅周太郎宛の普通はがきを持っている。ペン字で「申込人数一名 有島壬生馬 外二私名儀で原田―と申すものが申込かもしれません」と記してある。復信はがきの申込書に模した書式である。招待された観劇ではなかった。『御柱』の「見物」会が催されたのである。幸便として参加する。武郎は病中、遠路の生馬をあえて招待しなかったと解すべきだろう。

さらに館は、往復はがきに孔版印刷された「見物」会案内状も所蔵していた。往信はがきには「時 十月二十三日(日曜日)」、「入場口 新富座前茶屋さるや」、「会費 御一名六円五拾銭(特等席)」、「正午十二時開場(「御柱」開幕六時半)」と列記されている。日時が判明した。三宅は小内山薫、阿部次郎、小宮豊隆、土方與志、里見禪ら六幹事のひとりである。

収蔵品に「有島様」の宛書きをつけ、日付印を押した新富座大入袋十枚がある。興行は成功した。武郎も精勤している。もう一本、「有島生馬内 原田茂子・貞子」二名の申し込み返信はがき(十月二十一日)付投

〔函〕も出て来た。生馬は案内状をそのまま妻信子の実家方に送って、誰れか、「見物」会参加を促したのだ。生馬の武郎宛礼状の日付に戻る。「十月二十六日」発信には、それゆえの確実な執筆理由がなければならぬ。二十三日の観劇後、深夜、極楽寺の別荘に帰省した生馬はほとんど半死半生の体であろう。絶対安静の日々を送っているが、横臥の身を起こして筆を執らしたものに接したからに相違ない。

書中に「一昨日は再び御見物だった相ですが」という。武郎にとっては二十三日「見物」会挨拶に続く、二十四日の新富座行であった。館所蔵の返信はがき三十六枚中、観劇申し込みは五十四名に上る。他にうずら一問、棧敷一升の註文も来る。もともと、「十月十六日」発信の案内状に、「十九日」申し込み締切りは強引だ。実際、十九・二十日の復信投函や、二十二日付速達も多い。一芝居茶屋では即応できまい。「見物」会は翌二十四日も催されたと仮定するよりない。原田茂子・貞子も二十四日組で、情報をもたらしたもののか。

当二十六日付『東京朝日新聞』五面は、大きく紙幅を占めて、『御柱』上演エピソードを載せる。写真二葉、その説明に「棧敷に腰かけた赤彦氏／（下は吉右衛の名人平四郎、昨夜新富座で）」とある。記事の見出しは『御柱』の主人公／龍川平四郎の血縁に／歌人島木赤彦氏／祖先の面影を偲ぶべく／作者有島氏と新富座へ」。前二十五日夜の報道である。生馬は最後の一行を注視したに違いない。ならば、武郎は三日間連続した新富座行となる。これに触発された発信であった。ほかに、「二十六日」付発信の動機を見出せない。

生馬はわが身の疲労困憊、病臥より察して兄武郎の身の上を案じる。いたわり、ねぎらう。言外の心情、こよなく優しい。

手紙一本、調査、発掘すべきこととは山積している。果さねば、いっこうに読み解けぬ。

——以上、この一年間の近況報告ひとつである。

二〇〇二・一一・一〇